
読書感想文

乾燥用

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

読書感想文

【Nコード】

N40920

【作者名】

乾燥用

【あらすじ】

感想文集。

ちよこちよこ書く感じで。

夏目漱石『私の個人主義』

私はそれほど多くの作家を知らないが、漱石は近代日本、また現代における思想の礎を作った人物ではなからうか、このように考える。

一概には言い切れないかも知れない。しかし私たちが生きている現代、その思想の根底にあるのは、個人主義、自由主義ではなからうか。

ではもし誰かに私たちが個人主義、自由主義とはなんぞや、そのような問いをかけられた時にどう答えるべきであろうか。この質問の答えとは、辞書的な意味でもあり、人生論でもあり、コミュニケーション論でもあるだろう。

そして、私が読んだ『私の個人主義』、これにはその触りの全てが載っているように思う。

話は変わり、『私の個人主義』の感想として簡単なことから書きたい。法的な問題を除いた上で考えてもらいたい。もしも、私、そして家族、近所住民、その全てが個人の自由というものを尊重すれば、どうなるだろうか。限りなく極論の話である。これは二パターンの結果が見える。

一つは誰もが自分勝手に物事を行う。隣の迷惑など顧みず、自分の欲望の限りを尽くし様々な悪事を行う。これを積極的行動と言い表すなら、積極的行動は無法地帯を生む。

例えば、朝起きて、飯を食いたい、台所には飯も汁も何もない。私は憤慨する。親に「飯はどうした」と言う。親は「飯を作る気分でないから作らなかつた」と答える。私が「そんなことは知らぬ。飯を作れ」と言う。ここで一波乱起きる。喧嘩になる。その騒音を聞いて隣人が腹が立って怒り出し、私の家に怒鳴り込む。更に波乱が大きくなる。事によっては殺してしまうかも知れない。

二つ目は誰しもが相手の自由を尊重して、雁字搦めになって、身

動き一つ取れなくなる。これを消極的行動と言い表すなら、消極的行動は社会として成立しえなくなる。

例えば私は飯を作ってほしいが、飯を作るかどうかは親の気分次第であるとすれば、私は親に問いかけることもない。そのままその希望も風化され、希釈され、行動することもままならなくなる。

これらの現象は漱石の小説では様々な形で書かれてある。一つ有名な『こころ』を取り上げて考えてみよう。

先生、という人物がいる。先生にはKという友人がいた。そして先生には現在妻がいる。

この妻が誰のものでもない随分昔のこと、Kは実はこの女のことを愛していた。先生もこのことを知っていた。しかし、先生もこの女を愛していた。

ただこの三角関係で留意していなければならないことが一つあり、Kは先生に早くからこの女のことが好きだということを伝えている。そこで、先生はKを出し抜いてこの女を妻にする。そしてそのことに衝撃を受けたKは自殺する。

様々端を折ったが、大体こうなる。先ほどの積極的行動、消極的行動になぞらえれば、先生とは積極的行動者で、Kは消極的行動者とも言えるであろう。

人間の精神をある角度から分析してみるとこのようになる。我々は誰かを愛することは自由であるが、掛け値なしに愛することが認められるということはない。その愛が必ず響いて自分に帰ってくるという保証もない。そして、大抵の順序とは早いもの勝ちで決まる。だからといって自然現象による恋愛だけを認めるのであれば、それもまたおかしいものだ。

例えばよくある話として、幼馴染だから自然と互いの恋愛感情が育まれ、結果落ち着くところに落ち着く、このような自然現象の恋愛だけを認めるのだろうか。

そうではない、自然現象による恋愛だけを認める、という限定的立場を取れば、それこそが自由という言葉を損ねる。そして、理解

すべきは自由という言葉の起点に歩いて行くと、自由という言葉を歪めると言うパラドックスが存在していることである。

つまり、自由という言葉だけでは自由についての正答を引き出せないことに気づかなければならない。何を自由に加味して話を引き出すのか、私はここに広範的な意味での現代思想の始まりがあるんじゃないかとも考えるわけだ。

夏目漱石『私の個人主義』（後書き）

例えが悪い。仕方なし。
文章を書く練習だ。

川端康成『古都』

—

川端康成と言えば、大抵は雪国の知識の話で始まって、そこで終わる。「トンネルを——」で始まる一文とは確かに良い文章だと、そう思う。

だからこそ、多くのメディアで今でも時折取り上げられる。そこにノーベル文学賞という言葉が足されれば、有無を言わず、ポジティブな評価が得られるというものと、そういう気もする。

そこで、そのポジティブな評価、そこに少し立ち入って川端康成の良さとはどこにあるかと、こう考えるわけだ。色々思索し、総合し、そして言い表すと大体このようなイメージにたどり着く。

「すぐれた写実性と、誰もが心緩やかに染み入るキャッチーな文、そしてその一文の奥に広がる背景の豊かさ」

例えば『伊豆の踊子』の冒頭、そこにはこうある。

道がつづら折りになって、天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。

つづら折りという単語のイメージが大山を勾わせ、杉、雨の白という色彩のイメージ、そして山特有の天候の変化。短いながらもその全てが含まれて、伊豆の山中の情景が行ったことがなくても何となく浮かんでくる。そして比較的平易な文章に仕上がっている、これもまた名文だと、こう思う。

このように深い洞察力とそれを事細かに描く力を持っていて、そのイメージを上手く読者に想起させようする力。それが川端康成最大の魅力ではないかと考えるわけである。

ただ、ただ、である。ただ彼は限りなく観察者だったのではない

かと、こうも考えるわけである。そこが惜しいかな、川端康成の限界だったのではないかも、思う。必ずしも言い切れない点はあるだがそう思う。彼は消極的行動者、であつたと。

例えば『眠れる美女』であるとか、『掌の小説』にある『バツタと鈴虫』などがそれに当たる。興味があれば読んでもらうとして、彼は積極的に小説に手をつ突っ込んでかき回すことをそれほど美しいことだと考えていない気がする。だからこそその写実の美しさが生まれたのかもしれない。

とりあえず、この簡単な川端康成についての話は、三島由紀夫の『眠れぬ美女』解説で締めるとしよう。

眠れぬ美女の世界は、無力感によって悪から隔てられている、と考えるとき、川端氏の考える「悪」がどのようなものであるかが臆るげに浮ぶであろう。それは活力が対象を愛するあまり滅ぼし殺すような悪であり、すべての人間的なるものの別名なのである。

二．

『古都』を読んだのは何時のことだっただろうか。忘れてしまつたが、高校生の頃だったように思う。

きっかけは何かの名文集の本を借りて、その中に『古都』の冒頭にある「すみれともみじ」の一文があつたからだったと思う。それを軸に読み始めたといつていい。

詳しいあらずじにはあまり触れないとして、『古都』には様々なレトリックを詰め込んでいる。一見するとそこに目を奪われる。それほど美文とは甘美なものだと思う。そこで作品を味わうのもまた立派な読書観だと思う。

だが、巧妙なレトリックで描かれた『古都』の中に現れる美しい自然、また建造物という物言わぬ物に、作者が何かを言わせなければならぬと考えると、そこにあるのは登場人物の喜怒哀楽が散り

ばめられたエゴのような何かだろう。

特に『古都』では主人公である千重子の複雑な環境、そして後に現れる千重子の双子である苗子の問題、そして千重子の父が考える下絵の問題がある。

そのあたりを話の軸にされるために中盤までにかけては何となく悲壮感が漂うのだが、そこから真一や秀雄という千重子に好意を持つ男たちによって、悲壮感という場所から更に明るい場所へ引き上げられる。

一方で苗子が千重子の家に泊まりに来る時、苗子はまだ悲壮感という場所にいる気がする。それは双子だからこそ、似たような場所に立っていたのかもしれないし、または苗子の境遇がそうさせたのかもしれない。

はっきり言えるのは苗子の中に未だ存在する旧制的な考え方、身分、という思考なのだが、そのある意味理不尽で自分が自分を強制的に縛ってしまう力に、物悲しさが宿ってしまうのは何故だろうか。それは自分の力では解決できない無力さがにじみ出ているからだろう。

そして苗子は千重子の幻影として去っていく。幻影とは居ないはずなのに居るように見えるものという意味だ。しかし、実際に居るはずなのに幻影として去ろうというところその意思はやはり半ば強制的に行われているところからくる悲しさがある。

幻だとか夢だとか、そういった細い感覚は簡単に崩れ去ってしまう。それは実体のある現実のものによって、だろう。そのため『古都』のような、登場人物の会話や、背景の描写などが相互に織り成して作られる何となくぼんやりとしたもの悲しさを、はっきりと最後に現れる苗子の体の温かさや秀雄や真一によって破壊してくれるからこそ、もの悲しさの中に読了後の爽やかさがある。

川端康成『古都』（後書き）

何か変な文章だ。

作品自体はTOP10に入るぐらい好きなんだけど。

谷崎潤一郎『痴女の愛』

—

谷崎潤一郎を述べる時、谷崎の独特の美的感覚であるとか、白人優位の視点であるとか、美的マゾヒズムであるとか、そういったものはどうしてもよいように思われる。

谷崎の特徴、といえばそういったところに現れるから、そういった評価するのは順当なところだろうが、そこに固執してしまつては美的なフェティストたちだけが所有する読み物になってしまう。

最近マイケル・サンデルの本を読んだ。NHKで放送が行われていたものを書籍化されたものだ。それを見たせいか、『痴人の愛』を見たときの印象とは一つであつた。それはジョン・スチュアート・ミルの回の話である。私の読解を通せば、ミルの回には大体こうある。

「我々は価値を判断する必要があるものの、その価値とはいかように判断されるべきか。一つ言えることは愚者の考える価値とは一見して分かる程度の価値であり、君子の考える価値とは含蓄のある価値である。そしてその価値の総量とは君子の考える価値の方が大きい」

ただここにもう一つ考える部分がある。愚者の考える価値とは甘美であるが、君子の考える価値とは一概に甘美なものとは言えない。何故かと言えば、君子の考える価値とは理性に基づくが、愚者の考える価値とは本性に基づくものであるからだろう。

例えばアイスクリームは美味いが、栄養素として考えた時にはそれが決して褒められる食べ物でないことは誰もが知っている。だが、その甘さに引かれて誰もが口にしたがる。このようなことを文学的に書こうとすれば『痴女の愛』の一編でも書けそうなものだ。

この問題とは非常に普遍的なものだ。我々は常に理性と本性の間

を行きかっている。だからこそ理性に偏りすぎた美德というものに違和感を感じるし、本性に引き摺られすぎた人間を簡単に肯定はできない。

我々は理性と本性のどちらに身を委ねるべきなのだろうか。

二

より、作品的な問題を考えた場合、『痴女の愛』の一番のポイントはナオミの心理描写があまりにないために、ナオミがどのような気持ちであるようなことをしているのだろうか、というぼんやりとした疑問が生まれるのではないだろうか。

より鮮明にすればナオミの持つている愛情とはどのようなものなのだろうか、ということに繋がってくるのではないだろうか？

ナオミの心理描写があまりにない、という点を掘り下げれば、譲治の一方的な心理分析に重きを置いている、といわざるを得ない。

そこからわかるように譲治の客観性、または傲慢さというものが所々に現れていることが注目される。

話の発端は美しい少女ナオミを自分の妻にしたい、という物欲だ。物を言い、時には抵抗し、権利を語る、そういった人間を物欲で自分の思い通りにしようというおこがましさが、そもそも譲治の計画の破綻を意味している。

彼女を一人の人間とすれば、譲治は考慮すべきところは多様にあった。彼女を様々な方面で教育する必要があった。しかし譲治は世間と隔たりを作った。ナオミを半ば物と認識しているからこそ、彼女を家というおもちゃ箱の中に放り込んでもよいと思っているように見える。無論、彼女も箱の中に放り込まれてもよいと同意したが、譲治に理性があれば、ナオミを箱に入れていいのか、どうなのかという二者を択一することは難しいわけではない。

そのため、スタート地点から、譲治とナオミを考えれば、彼らは繋がっているようで繋がっていない個々が独立した、まさに文中に

あるように「友達」であつた。

讓治が持つ愛とは美しいものを手元に置きたい、という物欲であり、ナオミの持つ愛とはただの無邪気さからくる愛らしさだろう。そこには打算しかない。

谷崎潤一郎『痴女の愛』（後書き）

あまりこの作品は面白くは無い。

また、この後も色々書いたが、話がずれそうなので消した。

端的に言えば一つに義務の問題だった。

我々はこうすべきだという義務はどこから発生するのだろうか、ということだった。

二つに話として、最後に讓治が墮落してしまうのは小説だから、こうなってしまうのか、それとも人間はそもそも墮落してしまうのか、という問題だ。

2つ目の問題が重要で私たちは理性と本性どちらに身を委ねるべきなのか、という本文がここに引っかかってくる。

それは小説論、としても重要だろうし、人間としても悩まなければならぬ。

閑話休題 近代自然主義小説

一・

最近、田山花袋の『蒲団』を読んだ。全く面白くなかった。何故面白くないのか、という問題は後々考えるとして、花袋の『蒲団』のような自然主義小説を読むことは大変意義あることで、これは現代小説を考える上で重要な要素でもあると思う。

私の主観で言えば、自然主義小説の重要なところはリアリズムの追求と自我の開放、この二つだろうと思う。リアリズムの追求についてはそれほど言うところはないと思うが、自我の開放、というものは説明が幾分か必要だと思う。

我々は常に何かしらの閉塞感というものを感じざるを得ない。それは上下関係かもしれない、自分の行動の限界範囲に感じるかもしれない、まあ様々である。その点、特に当時においては古臭い社会秩序が新世代においての閉塞感の象徴であった。

例えば恋愛。私はあの人が好きであるけれども、身分の差というものがある、という問題がある。また、親が決めた許婚と、自由恋愛では許婚が優先されること。それを反故にしようとするれば、駆け落ちをするというのがよくある話である。

つまり、この社会秩序を反故にしようとする行為、これが自我の開放であった。

そこで、こういった恋愛の話をリアリズムと自我の開放を追求した自然主義小説で描こうとすれば、恋愛なら恋愛の問題が起こる、それを反故にしようとする。そこで失敗、成功様々起こるが、それで大体話としては完結する。

これでは面白いわけではない。分析的な小説としては勿論秀でてはいるが、作品と読者とは本来個別の存在である。つまり、この二つを結びつけるところとは、世間の反故にしようとする自我の開放の

連帯感であり、自我の開放を終えた後の連帯感が全く無い。ここで我々現代人が自然主義文学を読んだ時に面白くない、と考える一因がある。

我々は自然主義作家が言うところの自我の開放を終えた人間である。別に駆け落ちをして社会的に隔離された人間であろうとも、そんな置きなど現代人にとっては屁のようなものである。よって自然主義小説自体の構成に連帯感を感じないし、その自然主義小説が描いた自我の開放、その先を待っている人種なのではなからうか。

二．

そこで、現代小説を考える。自然主義小説と現代小説を比較して語る上で、自然主義小説の持つ一つ優位な点は、俗受けするような小説を書いてどうするんだ、という意識がある点であり、その背景には思想的に自然主義作家たちの方が成熟していたことがある。言い換えれば自然主義作家たちがある種の啓蒙小説を書くこととしていたことが、俗受けを批判できる理由の一つである。

勿論、先に言った論理、現代人は既に自然主義作家たちが描こうとした自我の開放を終えた人間であるから、論点はずれている。自然主義作家たちが描こうとしたものは既に用済みなのであるのだから。それでも、この自然主義作家たちが述べようとした部分を軽く見てはいけないという気がするのは、何故だろうか。

それは自然主義作家たちが言ったことを内包していないような気が、現代人にはするからだろう。過去に出た作品であるとか思想であるとか、そこを継承せずに物事を述べるのは大変つまらないことだ。

勿論、自然主義小説には弱点があった。だからこそ弱点を補完したような次なるものを考えなければならぬと思う。

閑話休題 近代自然主義小説（後書き）

前回の谷崎でも思ったけれども、途中で燃料切れて尻切れとんぼになっちゃうね。

仕方ないね。

多分閑話休題って意味間違ってるけど別にいいや。

あと簡単に『蒲団』の感想を言えば、「もののあはれ」って感じでした。

これも多分意味違っけど別にいいや。

続 閑話休題 筋の話

今回は自我の開放の終焉について書いたと思うが、どうだっただろうか。では自我の開放の先とは何かということを考えてみる。

結論から言えばそれは確立したものではない。なので傾向やベクトルを考える。

そうすると、意味のある物事から意味のない物事への到達というものが一つ言える何故こうなるのか。

解釈の始まりは個人主義であったように思う。既成の概念で生きてきた人々が概念という足枷が外され自由を手にするということが始まりだった。それが前回の自我の開放ということだった。

切り離して「自我の開放」という事象を指せばそれだけで終わるのだろうが、マクロで見ればそれは既成の概念の破壊と新たに形成される概念の繰り返しという構成である。歴史的な感覚を覚える構成のようにも思える。栄枯必衰とでもいうのか。

詰まるところ、物事にはどうも限界があるようだ。長所はあったはずだが、どうにも短所がある。短所をできるだけ極小化して、長所をできるだけ極大化して、次なる概念に移行する。そのベクトルがこの破壊と形成という一連の構成を行わせる。

が、普通であるものの、個人主義以降の特徴として、一つの問題がある。

概念というものが国家本位であるとか民族本位であるとか、壮大なものから個人本位に移譲されたものだから話が大きく変わる。我々がどこに進むべきか、というものは我々が決めなければならない。つまり、それは概念というものが国家や民族といった集合体を確立させるもの、という立ち位置であったところから、個人を確立というものに推移したということで、そこから派生する概念は一気に多様化した。概念ではなく個人の価値観といった方がスツとはまってしまうほどに。

文学で言えばそれが耽美派であつたり、白樺派であつたりした。ただ、それはまだ人間の本性に訴えかけるものであつた時代でもある。人間の美德、優しさ等々の道德のレベルで収まつたり、はみ出したりもしたが、まだ純文学として許容できる範囲であつた。

そこで筋の話が持ち上がる。そのはみ出した部分を色濃く抽出したのがこの話になる。

この到達点が芥川と谷崎の論争、というのが自分の解釈である。つまり、概念が集合体に依存することによって一元化されていた現象が消えうせ、多様化した個人の価値観を改めてどこかへ集合させるにはどうすればいいのかという問いへの答えが『文芸的な、余りに文芸的な』に集約されているのではなからうか。

その答えの一つに「詩的精神」があり、「リアリズム」がある。我々の純粹なる心に訴えかけようとしたり、変化しようが無い真実を描こうとすることで純粹なる土台を作ろうとした。これにより、改めて概念を一元化しようとする。

そう考えていけば、現代小説というのものもある意味、概念や個人の価値観の一元化を努めようとしているのがわかる。小説で強烈なキャラクターに依存する傾向はキャラクターによって我々の嗜好を一元化しようとする試みであると考えられなくも無い。

これが最初に述べたの考えられる傾向、「意味のある物事から意味のない物事への到達」の答えになる。

古臭い思想に依存する傾向から無数にある個人の価値観に依存する事実、ここまでくると「嗜好」なのだろうが、そちらへ推移した。その個人の嗜好とは本質的には意味を全く成さない。

特別に生産的であるとか、建設的であるとか、そういった意味は全くないのだけれども、個人の純粹なるものを追及すれば、それは俗っぽいものになるというの莫名其つなものだ。

例えて言うなら料理は隠し味っていうものがあつた方が無論美味しいのだけれども、隠し味だけで料理する馬鹿はいない。それでも料理しようとした時、それは全く別の料理である。それが美味いか

不味いかは別として。
こんなところだろうか。

続 閑話休題 筋の話（後書き）

というエッセンスがあるんじゃないか、という話。
微妙に中身が抜けてそうだが仕方が無い。

一、二週間じーっと本気で考えて書こうとすると、疲れる。

多分今までで一番頑張ったんじゃないだろうか。

そして見直すと、結局俺は小説の話を書いたのだろうか、なあって最後に一つだけ

「短所をできるだけ極小化して、長所をできるだけ極大化して、次なる概念に移行する。そのベクトルがこの破壊と形成という一連の構成を行わせる」

この傾向は未だに続いているのでしょうか？

閑話休題末尾

—

前回は「嗜好」ということを結論で書いてしまったために大分未來的な、とでも言えればいいのか、そんな話で終えてしまった。ではそれに対になるものを模索すれば、どうなるか。話をまた前の問題に引き伸ばしては問題がある。よって概念的なものではなく感情的なものでなくてはならない。つまりここでやっと「心理」に到達する。

この「心理」という「嗜好」の対は番いである。

どうも「嗜好」に毒されると、占有的なものになる。排他的になる。このことは非常に端的であるけれども『痴人の愛』で書いた。

また個人が個別である以上、誰かに強制して愛してもらうことはできない。このことも非常に端的であるけれども『私の個人主義』で書いた。

そのため「嗜好」とは「この指止まれ」の状況になる。来るもの拒まず、去るもの追わずと、こうなってしまう傾向になる。

だからこそ「心理」が必要になる。人間が人間である以上「心理」によって目的が定まり、行動がある。この自律のプログラムが「嗜好」という多元的な土台を一元化するものではなかるうか。推理、探偵小説ではこの役割を話の筋が補完するのだらうが。

また「嗜好」が同好の士の寄り合いである以上、その「心理」とは限りなく必然なのだ。好きである理由なぞ、誰が聞くのかということになりがちである。その意味でも「心理」が必要不可欠になる。必然を必然だからと言っては論理の否定になる。その過程に潜むものこそ切り取らなければ何を切り取るというのか。

逆に必然を必然として受け入れてしまうと、そこには思考が何一つ生まれない単なる娯楽に陥る。それはそれでよいのだが、真剣味

が欠けるといわざるを得ない。

二

この閑話休題、長々と書いた。長々と書いたが論理の否定とは、と書いてて考えた。否定の正攻法は簡単である。

ここがおかしい、意味が分からない、文脈がおかしい、論理の破綻等々。簡単ではあるが、これは難しい。論理が啓蒙的で、情熱的で、意味がある、そんな論理なのか。大げさに書いたがつまり、論理さえも嗜好ではないのか、という疑念、ここに尽きる。論理が論理として認められるのか、その疑念に苛まれる。

このような思想的な問題における懷疑主義はそもそも破綻しているのだから、打破は簡単であるが、その勇気が持てるのか。

第二に邪道として論理が嘘であるとする場合。論理とは少なからず正によって成り立っている。

それを虚と引っくり返すのは一番手っ取り早い否定であり、技術である。なぜ技術と言えるのか。それは嘘が心理の駆け引きであるからに違いない。

私が嘘を言えば相手は嘘と信じるのか。嘘と信じた上で嘘を上塗りするのか。嘘と知らない上で話を通して、嘘の上で自分が踊っているのか。

ということとでそろそろ技術の領域に触れて行きたい。だけれども、改めて思うのは論理ありきの技術なのだから、ということだ。技術とは心理のベクトルの変化の付け方なのだろう。

閑話休題末尾（後書き）

勢いで書いた。

というわけで一つ区切りがついただろう。

次回は本題に戻って太宰でもやるか・・・な？
ちよつと書き方変えますか。

小林多喜二『蟹工船』

—

プロレタリア文学の金字塔とも言える『蟹工船』だが、昔、中村武羅夫という人物が『蟹工船』の欠陥を指摘した有名な話がある。

それは「組織悪が書かれてあるのではなく、個人悪が作品内で描かれている」ということである。

プロレタリア文学はマルクス主義から派生した文学であり、マルクス主義は経済構造、社会構造批判が主であるから個人悪を追求してしまった蟹工船は如何なものかという批判がある。

ここでいう個人悪というのは無論浅川という船の監督の横暴な態度である。そこで中村武羅夫は『蟹工船』が浅川の良心という問題を中心に考えれば、『蟹工船』にプロレタリア文学としてのロジックはないと考えたのであろう。

ここから何を考えるべきかと言えば、文学性、もしくは個人の倫理観と言ってもいいのかもしれないが、それと対称的に存在する社会性の問題であらう。

文学の中にはもちろん社会小説や啓蒙小説が存在する。だが、文学性を考えれば、（何を持って文学性とするかは各人の問題ではあるが）、心理描写が外せないものではないだろうか。

そこでよく見られるパターンとして、主人公をマイノリティーとして、社会に潜む巨悪に立ち向かう構図である。この構成であれば、主人公の心理の揺れを描けるので、まずドラマが作ることができる。次に主人公が社会に潜む巨悪を分析するために社会小説としての役割も果たすことができる。

この例を取って『蟹工船』を考えると、『蟹工船』は主人公が居ない三人称作品である。そうすると琴線に触れるようなドラマを作成することはまず難しい。次に三人称であるから作品が構造分析の

性質を帯びる。そこで社会小説としての役割を一旦手に入れる。しかし、やはりドラマがないものだから面白くはない。

そこで浅川が現れる、彼は資本家という立場から小説の主役になり得る。悪党ではあるものの、彼の身振り手振りをこと細かく書くことで、読者は主人公という本来同調する役割は作品内にいないものの、悪党浅川の敵対心が主となって小説内に入り込むことが出来る。

私はこれが中村武羅夫の指摘が作られてしまった要因ではないだろうかと考える。

二

では、どうすべきであったか、どうすればこのような指摘から逃れることができたか、という考えをしなければならないう。が、プロレタリア文学を書くこととする人間でもないで、この結論を求めることは難しい。

なので話を少し変えたい。そもそも、話になるが、昔読んだ対談集でこんな話があった。宮本顕治が言ったのか、青野季吉が言ったのか忘れてしまったが、「プロレタリア文学では文学性よりも社会性を重視するべき」という話があった。つまり小説のドラマの問題を描くのではなく、資本家と労働者の対立を明確にし、一般市民に喚起し、啓蒙する力を重視しようという話だった。

プロレタリア文学については「この社会性を重視する」という視点は良く分らない上に難しいが、一般の小説を考えた時にもこう言った問いは非常に有用な言葉である。

つまり、二つの事象のどちらを優先すべきなのかという点である。一つは重要な性質ではあるものの一般の受けは良くない。もう一つはそれほど重要でもないが、それを混ぜた方が一般の受けが良い話。私自身は前者を重視して読んだり書いたりしようとすることが多いのではあるものの、後者が大事なファクターであることが認めて

いるつもりだ。

要はプライオリティーの問題なのだろう。どちらを優先すれば、より自身の得になるのだろうか、という思考である。つまり、そのプライオリティーに準じたときに批判を受けてしまった、欠陥を作ってしまったという問題に解釈してしまえば、『蟹工船』が受けたときの指摘というのは単なる揚げ足取りに他ならない。

作者は個人の欲する所を満たし、その供給はある一定の需要者達の心を満たしたのであれば、それは大した問題ではないのだろう。これが重要なところさえ抑えていれば別に良いだろうと思う私の言である。

ただ、そういった思考を持つ私としては反対に一般に迎合しようとするものに対して非常に危惧するところがある。それは迎合するあまりに、別のものに取って代われる可能性があることである。

『蟹工船』のようにプロレタリアを愛するものに作ったという理由ではなく、単に迎合しようとして、万人に愛されようとして作ったものであれば、それはメッセージ性が本当にあるのかという疑惑がついてくる。また迎合を使用した結果、安易なものが出来上がったとき、その上位互換に簡単に取って代わられてしまうことにある。疑惑は尽きない。

小林多喜二『蟹工船』（後書き）

もうちょっと話を膨らましてもよかったかなと思うが、資料を大して持っていないので、このような結果に。

単なる個人主義者の自分にとってはこんなことしか書けないのが……いやー残念。

太宰は中々読み進められていけませんので、いつになることやら。

志賀直哉『城の崎にて』

—

最近は初心に帰って色々なことを考えているので、私の中で一番好きなこの作品を取り上げようと思った。

好きな作品を読むというのは良いことだ。好きな作品にだけ落ち着いてしまっても困りものだが、大抵は良いことだ。

そして、好きな作品が何故好きなのだろうかと考えれば、それは大抵シンパシーなのかもしれないと思う。具体的に述べることの重要性も勿論あるだろうが、大抵はシンパシーだ、印象論だ。

そう思えば、一番『城の崎にて』にシンパシーを私は感じているのかもしれない。 どういったシンパシーか、という話をする前に、一つ別の話をしたい。

孤独、というのは静か、ということを意味するのだろうか？ 寂しさ、というのは良いことなのだろうか？

些か唐突な話ではあるけれども、この感覚が『城の崎にて』で重要な要素であると私は思う。

世間では孤独であるとか、寂しさであるとか、静かであるとか、こういった言葉の意味するところは大抵ネガティブな印象を持たれる。

人間が他の生物と比べて社会的な動物である以上、他の人間との接触が少なければあまり良い印象は持たない。

最もな話であるけれども、元々の日本人の性質とは、奥ゆかしさであったような気もする。以心伝心であるとか、物をはっきり言わず、遠回りに物事を伝えようとするところであるとか、そういった性質じゃなかるうかと。

世界と比較すればそういったものは顕著に伺えるだろう。

こういった日本人の美德のようなところを感じ取らなければなら

ないあたりが何とも近代文学らしいというか、古典らしいというか、そういった印象を受ける。

今の世間、というものを考えると、そういった美德からは大分離れた地点に立ったと思う。これは懐古的な意見とも受け取れるかもしれないが、私の場合は現代から近代へと回帰したような気がする。それは近代を生きた人間ではないのだから、というのが主たるところだが。

現代の世間で自分をぶつけて、磨耗して、包丁で言えば錆びて、刃こぼれを起こしているような状況になって、昔の日本に回帰することで包丁を研ぎ直しているような状況だ。

寂しい状況というのは現代において、余裕なのじゃなろうかと、こう思う。一人で居られないのだから、そこでわざと一人で居ようと、故意に寂しさを作り出す。世間がけたたましいから、故意に静かな方面へ動く。

こういった意味で私は『城の崎にて』が好きなのだらうと思う。

二

さて、本文に話を移そう。事故に遭い、城の崎に療養しに来た志賀は三匹の動物の死を見る、というのが『城の崎にて』の大体のあらすじである。

まず、具体的に読まず、名文だけを拾いたい。それは蜂の死骸を見た部分なのであるが、

或朝の事、自分は一匹の蜂が玄関の屋根で死んで居るのを見つけた。足を腹の下にぴったりとつけ、触角はだらしなく顔へたれ下がっていた。他の蜂は一向に冷淡だった。巢の出入りに忙しくその脇をはいまわるが全く拘泥する様子はなかった。忙しく立働いている蜂は如何にも生きている物という感じを与えた。その脇に一匹、朝も昼も夕も、見る度に一つ所に全く動かずに俯向きに転がっている

のを見ると、それが又如何にも死んだものという感じを与えるのだ。それは三日程その儘になつていた。それを見ていて、如何にも静かな感じを与えた。淋しかった。他の蜂が皆巢へ入って仕舞つた日暮、冷たい瓦の上に一つ残つた死骸を見る事は淋しかった。然し、それは如何にも静かだった。

生きる者と死ぬ者のコントラスト。そして、本当に「如何にも」と言う言葉がこれほどしっくりと来る情景というものは、あつたかと、初見の時は驚いた。

何故死者が死者として、生者が生者として存在しているのか、どういった具合に存在しているのかということを、これほど明確に表しているものはない。

前にテレビだか本だか忘れたが、四十九日などの死者の弔いの意味とは、生者が死者との関係の整理をしているのだという話を見た。『城の崎にて』に描かれる蜂ほど人間は冷淡ではないものの、死者とは最後には生者の心の中で終わりの区切りつけられる存在ではある。

その象徴としてこの文を考えるとなんと悲しい気もするが、豊かさもある。死んだ蜂は生きていた時の役割を終えて、ある種の満足を得ている気もする。生きている時には得られなかった静けさをようやく得られたわけだから。

三

最後に若干具体的な内容を。

志賀は事故に遭つたわけであるが、その事故によってできた傷はもしかすると死に発展する可能性もある傷であつた。しかし、史実を見れば分かるように、志賀は事故の傷によって死ぬことはなかった。却つて大分長生きをした。

それを志賀は偶然の死、偶然の生存、死の享受、死への抵抗とい

う四つの表現を使っている。この四つを一つに収めていることをよく考えると、大分相反するものが詰まっているように思う。

思うが、これらの表現が一つに収まって行動しているのが人間であるし、それを丁寧に描いた志賀は芥川の言うように大分純粋な作家だったと思う。

そう思えばあまり論理的な感じで読むのではなく、ありのままに読んだ方が随分面白い作品ではないかなと思う。

志賀直哉『城の崎にて』（後書き）

簡単に書くことするのも中々難しい。

獅子文六『娘と私』

—

私はよく一人酒で飲みに行きます。一人でうんうん言いながら飲んだり、見知らぬ人としゃべったり、バーテンダーとしゃべったりすることは非常に面白い。それは酒を介して話すことが自分と向き合う作業になるからじゃないかと思うためなのです。

偶然の出会い、というものは小説ではよく描かれる一つのロジックですが、酒場というものは偶然の出会いというものの集合体でもあります。

酒を介して話せば、見知らぬ人とでもそれとなく形になる。時にはそれから発展してまた新しい出会いもある。芋づる式にどんどん出会えると言うのは小説では些か奇異なものとして見られるかもしれませんが、こと酒場に至ってはそれが普通なので、これがまた面白い。

酒場が出会いなら小説に限らず、本とは何と形容できるかと思ったりもしますが、デカルトは本について次のように話しました。

すべて良き書物を読むことは、過去の最もすぐれた人々と会話をかわすようなものである。

成程、と思いますが、私はここに一つ言葉を加えたいのです。それは、先ほど話したように偶然の出会い、という言葉なのです。

勿論、誰かに勧められたりした本や、作者名など知っている場合に購入してしまうことを悪く言っているわけではありません。

しかし、偶然に出会ってしまった本というのはそれらの場合に出合った名作の力に勝ってしまうのです。そこにはロマン的なものが加味されたり、美化されたり、そういう要素があるのだとは思いま

すが、偶然に出合ったしまった良い本の打率が低いからこそ、また尊いものだったりするのです。

こんな言葉がつい出てしまったのが今から書く『娘と私』の話なのです。

二

『娘と私』は元々演出や劇作家を行っていた小説家、獅子文六の作品です。

この作品はノンフィクション、それらしく言えば私小説という形式を取っています。

あらすじを簡単に言うと、戦前、文六とフランス人の嫁の間に出来た娘の成長、そしてフランス人の妻との死別、そして幼い娘を育てるためにした再婚。元々我儘で自由奔放に生きていたかった文六が娘を作ってしまったがゆえのエゴなどの心理描写を事細かく描いた作品、と言ったところでしょうか。

またそこには作家ならではの美的なものへの感情や、戦時中、軍隊を描いた作品を世に出してしまったために逮捕されるかもしれない、という世に出ることを恐れる気持ち、再婚した妻との間にある様々な出来事、フランス人との合いの子であるがゆえの娘と文六の境遇、他にも様々なイベントがどんどん出てくるので中々読んでいて飽きないです。

娘の成長、という意味では『知人の愛』なんかと読み比べても面白いかもしれないし、『娘と私』以前の私小説、ここでは『蒲団』などをさっくり読みましたが、その観点で読み比べても面白いかもしれないです。

楽しみ方は人それぞれだが私の場合は単純に読み物としても十分に面白かったです。特に文六と娘、そして再婚した妻との間にある心の揺らぎというのは非常に面白かったです。

当然私小説とはいえ、回想するように作品を描いているので、そ

の心の揺らぎと言うのは客観的立場から描いてはいるようなのですが、随分と生々しいから驚嘆します。

それは精細に描いた娘の成長がそう感じさせるのかもしれませんが、年齢とは、老いていく度に、思想や性格、体つきという表面上で伺えるものの変化というものもありますが、もう少し社会的であったり文化的なものを加味すれば、通過儀礼という言葉が思い浮かびます。

今でこそその通過儀礼と言う言葉の垣根は大分崩れ去ってはいませんが、昔で言えば元服、成人、初潮など大きなイベント事が年を重ねる度に存在していました。

一般に小説でティーンエイジャーを描いて恋愛事をさせるのは、その時期が恋愛の適齢期であるからでしょうし、思春期と相成って複雑な感情が描けるからその巧妙さを見るのは読者側からしても面白いからでしょう。

そして、『娘と私』にはそういった要素が絡みに絡んで面白さを感じる、といったところでしょうか。

また、再婚した妻との話に移りますが、この間の感情と言うのも複雑なものです。

文六は本当は結婚などしたくはなかった人間です。自由奔放に暮らしたい、気軽であるがゆえにの楽しさというものを味わいたかったが、フランス人との間に子供が出来てしまったために仕方なく結婚してしまった人間です。そのために、再婚した妻に求めることは娘の子育てでした。

夫婦としての営みのことを文六は勿論考えてはいますが、文六が一番欲するところは娘を育ててもらうこと、そして文六自身が文筆活動を滞ることなく行うことでした。

更に当然起こりうるであろう、死別した元妻と再婚した妻との比較。なんでお前は亡母のように動いてくれないんだという怒り。しかし、小説が進むに連れて大くなる再婚した妻との愛情がそこにはあります。

そもそもこの小説は後書きで、再婚した妻が亡くなった後に再婚した妻との回想記を書かないかという話があった、と文六は話しています。

ここで言うてしまふといけないのですが、そのことを頭に入れて、もう一回読むと大分味わいが変わるのではないだろうか。

獅子文六『娘と私』（後書き）

あえてですます調で。

新年早々初潮かよと言われた。

いいじゃねえか別に。

自分が二番目に好きな作品でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4092o/>

読書感想文

2011年1月12日20時42分発行